

二〇二二年八月二五日

瀬の音に残暑忘るる山路かな
渡船場の西日に透ける蛸簾
夕端居しきりに鯉の跳ねる音
抜きたての堀川牛蒡家苞に
ビルを呑むぞと雷雲の迫り来る

さつき
うつき
せいじ
満天
なつき

二〇二二年八月二四日

香煙に咽せる子供ら地藏盆
星月夜里山息をひそめをり
これよりは徳川道や法師蟬
虫の音に誘はれつつ土手歩む
ペダル踏む道どこまでもいわし雲
恐竜のごと湾に立つ雲の峰
参磴の手摺り灼けゐて役立たず
秋日傘合図に挙ぐる逢瀬かな
カメラマン腹ばひて撮る小鬼百合

きづな
うつき
わかば
雅流
ぼんこ
うつき
ひかり
はく子
ともえ

二〇二二年八月二三日

一雨の過ぎて坪庭虫浄土
草刈りてより生まれたる風の道
片蔭に鯉のひしめく用水路
朝顔の今日は何色朝戸繰る

菜々
三刀
せいじ
うつき

二〇二二年八月二二日

湖風に半ば巻き上ぐ秋簾
新涼の翠黛著き遠嶺かな
飛行雲貫く天の高きかな

菜々
ひかり
せいじ

二〇二二年八月二二日

お不動へ浄めの水や涼新た
地藏盆曾根崎裏の陋巷に
ひしめきて繫船揺るる葉月潮
鉄塔の幾何学模様大夕焼

ひかり
きづな
宏虎
よし子

二〇二二年八月二〇日

水打って動き出したる先斗町
灯下親し繰り返しよむ旅案内
急磴の吾につきくる鬼やんま
夕暮の空より鳶の笛涼し
飛び石のすぐに乾きし夕立かな
万緑に同化すカーブミラーかな
夫留守の日の大昼寝な咎めそ

満天
菜々
ぼんこ
ひかり
あさこ
よし子
きづな

二〇二二年八月一九日

甲子園果てたる空に秋茜
稲妻の一閃したるあとの闇
稲妻が虚空貫く刹那かな
礼拝のあと子どもらへかき氷
せせらぎの河原の昏れて虫すだく
百選の夕日に湖の風涼し
トラックの荷台が舞台夏祭り
水面突く蜻蛉トランプリンのごと
直立す櫓並木に秋高し
意地悪な雲垂れ隠す揚花火

あさこ
よし子
百合
せいじ
わかば
ひかり
さつき
こすもす
菜々
なつき

毎日句会みのる選・二〇二二年八月二八日